



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 278 号 2011.3.1 発行 社会政策研究所

=====

ウォールストリートジャーナルは、つなぐちゃんベクトルへは初登場です。日本の予算案審議への外国メディアの反応も見てみました。【kobi】

1 1 年度予算案が衆院通過 = 関連法案、めど立たず

ウォールストリートジャーナル 2011 年 3 月 1 日

一般会計総額 9 兆 4 千 1 百 1 6 億円の 2011 年度予算案は 1 日未明の衆院本会議で、民主、国民新の与党などの賛成多数で可決され、参院に送付された。憲法の規定により、予算案は参院への送付後 30 日で自然成立するため、年度内成立が確定した。自民、公明、共産、社民など野党各党は予算案に反対した。

民主党は、予算関連法案の採決を予算案と分離して先送りした。野党側は、関連法案のうち特例公債、税制改正、子ども手当の 3 法案については反対姿勢を変えておらず、与党が呼び掛ける修正協議には応じない構え。これらの法案は衆院での再可決も事実上不可能で、年度内成立は絶望的となっている。

予算案は、2 月 28 日深夜の衆院予算委員会で、与党の賛成多数で可決された。その後、与党は延会手続きを取った上で、1 日午前 2 時からの本会議に緊急上程し、採決した。自民党は本会議にも予算案の組み替え動議を提出したが、否決された。

予算案の衆院通過を受け、与党は参院予算委員会で 2 日からの審議入りを目指す。これに対し、参院で多数を占める野党側は、予算案と関連法案を分離した与党の方針に反発。1 日午前の参院議院運営委員会理事会で、政府・与党からの説明と謝罪を要求したが、与党側は謝罪を拒否し、引き続き協議することになった。

新型、「インフル 2009」に改称へ- 年度内にも判断

キャリアブレイン 2011 年 3 月 1 日

厚生労働省はこのほど、2009 年に発生した新型インフルエンザが感染症法上の「新型インフルエンザ等感染症」と認められなくなった後の名称を「インフルエンザ(H1N1)2009」とする方針を決めた。「新型」でなくなったかどうかは年度内にも判断する。

09 年 4 月に発生した新型インフルエンザは、感染症法 44 条に基づいて舛添要一厚労相(当時)が「新型」と宣言した。同法では、国民の大部分が免疫を獲得するなど「新型」と認められなくなった時には、厚労相がその旨を速やかに公表すると定めている。

厚労省は昨年 8 月、WHO(世界保健機関)の「ポスト・パンデミック宣言」を受け、季節性と異なる大きな流行などが起きなければ、今年度末をめぐりに「新型」と認められなくなった旨を公表し、通常の季節性の対策に移行する方針を示している。

障害者を支えて 20 年 京丹波の丹波桜梅園

京都新聞 2011 年 3 月 1 日

京都府内全域の障害者を支えてきた京丹波町中台の「丹波桜梅園」が 1 日、設立から 20 周年を迎えた。野菜づくりやモグラよけの制作、リサイクルなどで地域に貢献しながら、障害者が安心して働き、生活する場として、歴史を刻み続けている。

桜梅園は、養護学校高等部の卒業生の進路を確保しようと、京都市内の障害者や保護者らを中心に施設計画が立ち上がり、現京丹波町の人たちの支援を得て、1991年3月1日に開設された。

基本理念である「障害の有無にかかわらず、誰もが安心して、豊かに暮らすことのできる地域社会」を目指して、生活介護事業(50人)施設入所支援(40人)グループホーム・ケアホーム(12人)などを担う。入所者は府北部だけではなく、府南部の京都市や宇治市、長岡京市など10市町に及ぶ。

障害者自立支援法を廃止し、新しい制度が検討されるなか、依然として障害者を取り巻く環境は厳しい。「二十歳」を迎えた歴史を振り返りつつ、山崎要志理事長は「運営の見直しや業務の効率化は避けて通れないが、基本理念を忘れず、支援の手を緩めることなく、利用者の笑顔を大切にしていきたい」と決意を新たにしている。6日に式典を行う。

タマネギの除草作業に励む丹波桜梅園の利用者たち
(京丹波町中台の農場)



障害者を招き食卓会 「ののひるの会」

レストランの食事を楽しむ施設利用者や職員ら日田・玖珠地域の障害者に外食を楽しんでもらう「ののひるの会」が毎月1回、日田市庄手の「元気の駅」内レストラン「銀の鈴」で開かれている。日田出身の経営者2人の厚意で始まった食卓会で、これまでに延べ300人以上を招待。施設関係者は「みんなで外食する機会は少なくありがたい。利用者も朝からうきうきするなど楽しみにしています。笑顔があふれる和やかな会になっている。

同級生という2人は、同レストランの長沢道夫社長(61)と、保険会社経営の手嶋直義さん(61)＝大阪市。還暦を機に「ふるさと日田に恩返しを。障害者の方に喜んでもらいたい」と毎回20人を招待。2009年11月から毎月続けている。

市内の「神来の郷」施設長の大下小弓さん(61)らが世話人となり、地域内の16施設のうち毎回1、2施設に声掛け。20人を超える場合は各施設が負担している。参加者の中には、これまで外食を控えていたが、同会を機に出掛けるようになったという人も。大下さんは「ご家族からも感謝される。いい機会になっています」と話す。

このほど16回目の食卓会が開かれた。市内の福祉サービス事務所「ラム」(友田)と小規模作業所「スマイル」(天瀬町)の利用者や職員ら約30人が参加した。バイキング形式でそれぞれが好きなものをプレートに取り、和気あいあいとテーブルを囲んだ。

車椅子の利用者に介添えをする職員は「雰囲気もよく、いつもより食が進んでいます。ラムに通所する矢羽多美智(みちか)さん(20)は「(いつもの)弁当もおいしいけど、きょうは一段とおいしい。いろんな料理を食べました」と笑顔を見せた。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック

大分合同新聞 2011年3月1日

